國學院大學学術情報リポジトリ

芥川龍之介「鼻」論：揺らぐ〈傍観者の利己主義〉

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 岡崎, 直也, Okazaki, Naoya メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000280

芥川龍之介「鼻」論
―揺らぐ〈傍観者の利己主義〉―

岡崎直也

一、〈暗い〉結末と〈明るい〉結末

芥川龍之介文学の研究は、作者の自裁という伝記的事実から逆照射するように世紀末的憂愁や虚無主義を、ごく初期の作品にまで一貫して探りつづけてきた。「鼻」に関しては、「なる可く愉快な小説が書きたかつた」が、書き終えて「一向愉快とも何とも思はれなかつた」[1]との心境を芥川自身が明かしていることもあって、「人生に対する懐疑的な精神」や「利己的な人間性に対する諦観」のなか「他人の眼にうつる自分の姿に始終注意をひかれるばかりで、自己を絶対的に生かし得ない鼻長内供」こそ「人間性の本然の相」だ、との吉田精一の評価[2]が多くの研究者に、ほぼ共有されてきた。内供の〈自尊心〉と周囲の〈傍観者の利己主義〉との両者の心理が「鼻」には並存するという理解が、その前提である。「作品の出来栄えはさほどでもなく「〈傍観者のエゴイズム〉をいう作者の説明が、主題の奥行きを消した憾みもある」との三好行雄の「鼻」批判[3]にも、これは継承された。「傍観者の嘲笑に傷つく被害者としての内供を描く後半」と「長鼻ゆえに傷つく自尊心や偽善をあばかれる前半」とのあいだの「微妙な差」を三好は論難する[4]。また同論で

は、鼻が再び長くなった内供の「――かうなれば、もう誰も哂ふものはないにちがひない。」との囁きは「錯覚」であるとされ、救いのない〈暗い〉結末が、以後長く読みつづけられることになる。

しかし、そうした印象とは大きく異なる著名な芥川龍之介宛夏目漱石書簡の「自然其儘の可笑味がおつとり出てゐる所に上品な趣があります」という「鼻」評[5]を踏まえてか、〈明るい〉結末を読もうとの「鼻」論が、昭和の終わりから平成にかけて続々と発表された[6]。

さて〈明るい〉「鼻」論は、「傍観者の利己主義」をそれとなく知りえた内供が次のステージとして、自らの〈過剰な自尊心〉にこそ笑われる理由があったと自覚し、「他人の目から解放」される、との共通理解をもつ。その論拠を列挙すれば、以下の三点になるようだ。

第一に、弟子たちに笑われ、からかわれた内供が「鼻の短くなつたのが、反て恨めしくな」り、むず痒くなった鼻を「――無理に短うしたで、病が起つたのかも知れぬ。」と「恭しい手つきで、鼻を抑へながら」「呟いた」のを、後悔、反省と捉え、みずからの〈過剰な自尊心〉の非を内供が認識したと解釈するため[7]。

第二に、その翌朝、長い鼻に戻っていることに気づく直前に、内供が見た「庭は黄金を敷いたやうに明」るく、「まだうすい朝日に、九輪がまばゆく光つてゐる」風景と、思わず深呼吸した内供の「はればれした心もち」とが内供の〈明るい〉前途を予兆すると解釈するため[8]。

第三に、結末の「鼻が短くなつた時と同じやうな、はればれした心もちが、どこからともなく帰つて来るのを感じた」内供の「――かうなれば、もう誰も哂ふものはないにちがひない。」との囁きが、鼻が短くなった時のそれや「のびのびした気分」とは異なると解釈するため。つまり、「――鏡の中にある内供の顔は、鏡の外にある内供の顔を見て、満足さうに眼をしばたゝいた。」に認められた、虚像と実像との転倒は長鼻に戻った際には認められないとし、内供があるがままの自己を受け入れたと解釈するため[9]。

しかし、〈明るい〉「鼻」論のこれら三つの論拠は、充分な説得力をもつとはいえまい。「傍観者の利己主義をそれとなく感づいた」内供は「日毎に機嫌が悪くな」り、「二言目には、誰でも意地悪く叱りつける」と本文にあり、内供をからかう中童子の顔を「鼻持上げの木」で打った内供は、いっそう混迷を深めているようだ[10]。すぐ後の鼻を短くした後悔や反省を自己認識

の変革と解釈するためには飛躍があり、いささか根拠が不足しているのではないか。明るい庭の光景は、この直後、長鼻に戻ったことを知るときの内供の心境・解放感に見合った程のもの、とも思えるし[11]、「かうなれば、もう誰も哂ふものはないにちがひない。」と繰り返し囁くのも、鼻が短くなったときの「鏡の中にある内供の顔は、鏡の外にある内供の顔を見て」と、長鼻に戻ったときの「心の中で」とが異なると本当にいえるのか疑問である[12]。結末で内供は「長い鼻をあけ方の秋風にぶらつかせ」るが、「秋風」のなかであることも見落とせない[13]。

そして何よりも、「他人の目」から解放され、自己認識を変革しえたのであるならば、須田千里[14]が指摘するように「かうなれば、もう誰も哂ふものはないにちがひない。」と「他人の目」を気にする意識を内供が作品末で未だに抱くことには整合性がない、といえるだろう。

また一方で、作品冒頭の第二段落の記述――内供が長鼻を「今でもさほど気にならないやうな顔をしてすましてゐる。」について、「或年の秋」鼻が一旦は短くなり、再び長鼻に戻った内供が、その経緯の後の「今でもさほど気にならないやうな顔をしてすましてゐる」と、長鼻に戻った後も内供が自らの非に気づかぬ根拠に解釈する複数の先行論がある[15]。もっとも、これは松澤和宏が説くように「今」や「今日」などの「現在時制の使用が、過去のある事件を語るにあたって物語世界へ読者を誘うレトリックである」と捉えるのが「穏当であろう[16]」し、あるいはまた、「今」を「沙弥の昔から内道場供奉の職に陞つた今日」と等しく数年の期間で捉え、その後の「或年の秋」に鼻の療治をおこなったと理解することもできるだろうから、長鼻に戻った後も「他人の目から解放」されていない確かな根拠には挙げられないようだ。

二、宙吊りにされる〈傍観者の利己主義〉

さて「鼻」は、内供の「他人の目からの解放」による〈明るい〉結末と、解放されえぬ〈暗い〉結末と、論者によって正反対といってもよい読解が、それぞれに主張されてきたわけだが、これは〈傍観者の利己主義〉が作中に明示されているかに見えるのと異なり、結末で内供の「はればれした心もち」は明かされながら「他人の目からの解放」なるもの、内供の精神的成長と思しき自己認識の変革の有無が明示されていないからだろう。

しかし、そもそも、もうひとつの人間心理〈傍観者の利己主義〉は作中に明示されていたといえるのか。近年はこの点も見

直されている。

透徹した意識に貫かれた緻密な計算が重ねられる芥川の小説においては、現実の裏面に隠れた、いわゆる〈真実〉といわれるものを特権的な全知全能の語り手が鮮やかに分析・提示する、といった方法が広く認知されつづけてきた。たとえば佐伯彰一は、「作中で直接読者によびかけることも辞さ」ぬ「いわば全知全能」に近い「語り手」が「羅生門」や「鼻」などに認められるとし、「藪の中」などの「劇的な独白の組合せ」を経て「蜃気楼」「歯車」などで「語り手たることの根拠と理由が、語り手自身によって一きょに疑われ、問われ始めた」と主張する。[17]では、「鼻」における語り手は、本当に全知全能に近いといえるのか、物語の外からの超越的な註釈とも思える〈傍観者の利己主義〉の提示の仕方を確認してみたい。

〈傍観者の利己主義〉とは作者の認識によって事態の「不可視」の部分が「顕在化」されたもの、とする清水康次[18]ら従来の理解の延長線上に、「鼻」全篇で支配的なのは「焦点化ゼロ」の叙法で、語りが内供に焦点化される場面は「支配的なコードに対する一時的な侵犯にすぎない」とする友田悦生の論[19]がある。「内供にとってのこの謎は」「物語世界の外部に位置する語り手の支配下にあり」「すでに解答が準備されている擬似的な問題にすぎない」とする友田は、〈傍観者の利己主義〉こそ、人々が前より「つけつけと」「哂ふ」謎の答えとして明示されると説く。

それらと立場を本質的に違える山崎甲一[20]、戸松泉[21]、松澤和宏[22]の各論は、〈傍観者の利己主義〉は内供の思い込みであって、超越的な語り手による註釈ではない、との見解を提示している。これらの論を肯うなら、内供は責任を周囲に追及するばかりで何ひとつ正しい認識に到達できず、その不明は一層露わになり、だから結末の自己認識の変革が期待しづらくなるだろう。

ここで、「鼻」の草稿[23]を掲げ、〈傍観者の利己主義〉を内供の周囲に認めない立場から草稿と初出・初刊本文[24]とを比較検討した松澤論[25]の概要を紹介し、検討する。

鼻の長いのを苦にしてゐた内供は　その鼻が急に短くなつた時に　彼自身の顔が　如何に滑稽に見えるかと云ふ問題を　商量する暇に乏しかつたと云ふ理由もあらう　しかし内供の心を苦しめたものは　単に池の尾の僧俗が哂ふと云ふ事実ばかりではない　前には人が可笑しさうな顔をしても内供は必その中に幾分か自分に対する同情を看取する事が出来た（時としては　その同情が一種の侮辱のやうに思はれる事もあつたが）所が今　中童子や下法師が哂ふのを

見ると　そこには殆一点の憐憫さへも動いてゐない——神経質な内供はすぐにこの事実に気がついた

（「鼻」草稿Ⅴ—a）

まず、この草稿では「鼻が急に短くなつた時に　彼自身の顔が　如何に滑稽に見えるかと云ふ」ことを「商量する暇に乏しかつた」というように、語り手がその超越的な全知性を発揮して内供の洞察力の限界を冷徹に批評し、さらに「池の尾の僧俗が哂ふと云ふ事実」を客観的な現実として認めていたと松澤は指摘する。

愛す可き内供にとつて　之は全然　予想外な結果であつた　何故と云へば　造次にも顚沛にも　鼻の長いのを苦にしてゐた内供は　その鼻が急に短くなつた時に　彼自身の顔が如何に滑稽に見えるかと云ふ事実を　商量する暇に乏しかつたからである——内供は鼻が短くなつてから　前よりも一層　その鼻の為に煩されるやうになつた

しかし　内供を苦しめたものは　単に周囲の人々の顔に現れた可笑しさうな容子だけではない　神経質な内供にとつて　何よりも苦になつたものは　実にその可笑しさうな容子の下に潜んでゐる或種類の敵意であつた

（「鼻」草稿Ⅵ）

松澤は、草稿の次のこの箇所で、周囲の反応に関する語り手の記述から内供を「哂ふと云ふ事実」が消え、周囲の「可笑しさうな容子」と、内供が直覚する「或種類の敵意」との間には、〈微妙だが決定的な差異が発生している〉と説く。

すべての人の心には　互に矛盾した感情がある——人は或不幸な状態にある同族を憐むと同時にその同族が一朝その不幸な状態から脱出した時には（たとへそれが自己とは直接に何等の利害関係がない場合でも）その変化に対して一種の不満を抱く事を禁ずる事が出来ない　内供がその理由を知らないながらも　何となく不快に感じたのは　この模糊とした周囲の不満だつたのである

（「鼻」草稿Ⅵ）

内供は始、之を自分の顔がはりがしたせいだと解釈した。しかしどうもこの解釈だけでは十分に説明がつかないやうである。——勿論、中童子や下法師が哂ふ原因は、そこにあるのにちがひない。けれども同じ哂ふにしても、鼻の長

かつた昔とは、哂ふのにどことなく容子がちがふ。見慣れた長い鼻より、見慣れない短い鼻の方が滑稽に見えると云へば、それまでである。が、そこにはまだ何かあるらしい。

——前にはあのやうにつけつけとは哂はなんだて。

内供は、誦しかけた経文をやめて、禿げ頭を傾けながら、時々かう呟く事があつた。愛すべき内供は、さう云ふ時になると、必ぼんやり、傍にかけた普賢の画像を眺めながら、鼻の長かつた四五日前の事を憶ひ出して、「今はむげにいやしくなりさがれる人の、さかえたる昔をしのぶごとく」ふさぎこんでしまふのである。——内供には、遺憾ながらこの問に答を与へる明が欠けてゐた。

——人間の心には互に矛盾した二つの感情がある。勿論、他人の不幸に同情しない者はない。所がその人がその不幸をどうにかして切りぬける事が出来ると、今度はこつちで何となく物足りないやうな心もちがする。少し誇張して云へば、もう一度その人を、同じ不幸に陥れて見たいやうな気にさへなる。さうして何時の間にか、消極的ではあるが或敵意を、その人に対して抱くやうな事になる。——内供が、理由を知らないながらも、何となく不快に思つたのは、池の尾の僧俗の態度に、この傍観者の利己主義をそれとなく感づいたからに外ならない。

（「鼻」初刊本文）

「傍観者の利己主義」という作者の全知的な認識が提示されると見られてきた箇所の「勿論」「けれども」「が、そこにはまだ何かあるらしい」といった初刊本文の表現には、内供の自問自答の過程がかなり忠実に報告されているとする松澤は、時制も草稿時の過去から現在へと変わり、所謂直接話法に近いものとなると説き、語り手による状況説明が削除され、その説明には満足しえない内供の意識に即した表現に書き換えられていく過程が判明してくる、と整理する。

また、草稿では「一種の不満」と「この模糊とした周囲の不満」となっていたものが、初出・初刊では「もう一度その人を、同じ不幸に陥れて見たい」という攻撃性を孕んだ「敵意」に〈先鋭化〉していることにも松澤は注意を喚起している。

引用した「鼻」初刊本文の「——人間の心には互に矛盾した二つの感情がある。」から「さうして何時の間にか、消極的ではあるが或敵意を、その人に対して抱くやうな事になる。」までの問題の一節を松澤は、冷静に周囲を見渡すことのできない「内供本人が「何となく」思い「それとなく感づい」ていたと

ころを一歩踏み込んで、明瞭化したに過ぎない」と説く。したがって「傍観者の利己主義」は語り手に帰属する判断ではなく、「明が欠けてゐた」内供の思考を語り手が報告していることになる。

松澤論の方向性は大筋で認めたいが、芥川が自作解説[26]で「傍観者の利己主義」を「neben」［引用者註：「付随」］の位置に認めていることもあり、〈傍観者の利己主義〉を内供の周囲に実際は全くないもの、つまり錯覚と断定するのには、やはり抵抗がある。

まずは、「内供」が「この傍観者の利己主義をそれとなく感づいた」という言葉の語感に関わる。〈傍観者の利己主義にそれとなく考えを及ぼした〉や、〈傍観者の利己主義をそれとなく感じた〉ではなく、「感づいた」には、確実に存在するものへの〈気づき〉の語感があるのではないか。はなはだ唐突に介入し、いままで作中で明示されなかった、暗示されているとさえいえぬ〈傍観者の利己主義〉を唱える超越的な解説に違和感を覚えたはずの読者は、揺さぶりをかけられる。後に一部を確認するが、「鼻」では、内供以外の人物の内面は常に推測されるに留まり、断定される箇所はない。周囲の人々の内面が〈見えない〉叙述の中に、〈見える〉叙述が暴力的に介入し、それなりに〈いかがわしさ〉を匂わすのだ。

さらに、内供が「傍観者の利己主義をそれとなく感づいた」という言葉が、正確に言えば、内供が哂われた理由ではなく、内供が「何となく不快に思つた」理由として告げられている点も重要だ。つまり、内供が哂われた理由は作中で何ひとつ明示されない。虚栄心ともいえる〈過剰な自尊心〉と明かされないだけでなく、そればかりとはいえないはずの〈傍観者の利己主義〉とも明かされない。

〈傍観者の利己主義〉が、内供が「つけつけと」哂われるようになった理由として確実に信じられたならば、読者は、批評されつづけていた内供の〈過剰な自尊心〉の回収を作品末に探るばかりだ。しかし、〈傍観者の利己主義〉という言葉が宙吊りにされ、その有無や、それが「つけつけと」哂われた理由なのかどうかも明示されていない以上、読者は、内供の〈過剰な自尊心〉ばかりでなく、周囲の〈傍観者の利己主義〉をも作中に探るべく冒頭から読み直すように精読を促される。

三、〈見える〉内面と〈見えない〉内面

さて、「鼻」全編で、もっとも滑稽な読みどころと思える、

鼻の療治中の内供と弟子の僧とのやり取りや、二人の心理について具体的に検討してみたい。内供の内面を断定する叙述は、弟子の内面を一切断定せず、常に推測していることがわかる。

内供は「いつものやうに、鼻などは気にかけないと云ふ風をして」とあり、「わざとその法もすぐにやつて見ようとは云はず」「気軽な口調で、食事の度毎に、弟子の手数をかけるのが、心苦しいと云ふやうな事を云」いながら、「内心では勿論弟子の僧が、自分を説伏せて、この法を試みさせるのを待つてゐた」。つまり、内供は演技をして弟子の僧に向き合う。対して弟子の僧は「内供のこの策略がわからない筈はない」、あるいは「この弟子の僧の同情を動かしたのであらう」と、その内面を推測されていく。

次に弟子の僧は、一度茹でた長鼻を踏み、「時々気の毒さうな顔をして、内供の禿げ頭を見下しながら」「――痛うはござらぬかな。医師は責めて踏めと申したで。ぢやが、痛うはござらぬかな。」と内供に声をかける。直前では弟子の僧の内面が〈見えない〉叙述になっているので、「気の毒さうな」も、弟子の僧の思いやりを推測したと素直に読みたいところだが、吉田精一[27]や田中実[28]は、内供に合わせた演技を弟子の僧の言葉と態度とに指摘している。すぐ後の内供の「腹を立てたやうな声」で「――痛うはないて。」との返事が「実際鼻はむづ痒い所を踏まれるので、痛いよりも却て気もちのいゝ位だつたのである。」と解説され、演技が断定されるのと対応しているように捉えたのであろう。読者は、弟子の僧の内面を知ることはできない。

つづけて、鼻にできはじめた粟粒のようなものを「――之を鑷子でぬけと申す事でござつた。」と弟子の僧が「独り言のやうに」云ったのも内供の怒りや不満を恐れて演技したのか、弟子の僧の内面が〈見えない〉ので「独り言のやう」だと語り手が報告したのか不明だ。ここも内供が「不足らしく頬をふくらせて、黙つて弟子の僧のするなりに任せて置いた」のが「自分の鼻をまるで物品のやうに取扱ふのが、不愉快に思はれたからである」と解説されるのと響きあってもいるようなのである。

「弟子の僧は、ほつと一息ついたやうな顔をして」「――もう一度、之を茹でればようござる。」と療治の最後に言うが、これも、お為ごかしのポーズと見えなくもないし、思いやりをつくした後の安堵の心境の反映なのかもしれない。「内供は矢張、八の字をよせたまゝ、不服らしい顔をして」は、鼻が「何時になく短くなつてゐる」との感動を隠した内供の演技であることや、直前で内供も「弟子の僧の親切がわからない訳ではない」としたことが、弟子の僧の推測される心理に大きな振幅をあたえる。

つまり、当事者として視座と情報とを限定されている内供ばかりではなく、読者も、弟子の内面を知ることができず、〈傍観者の利己主義〉の虚実も知りえないことになる。

鼻を短くしてからの内供とその周囲についての叙述には、先行研究で指摘されるように、〈わらひ〉という漢字の使いわけがある。内供の内面に捉えられる周囲の〈わらひ〉は、「哂笑」として〈あざわらう〉意をなすシン「哂」という漢字が用いられ、これに対し、内供の内面を代弁しない叙述は、普通の〈わらひ〉、「笑顔」のエの字、ショウ「笑」が用いられている。[29] 作者によって実践された漢字の書きわけを享け、そもそも「傍観者の利己主義」というほど意地悪い周囲の「哂ひ」はなかったのだ、との主張[30]があるわけだが、作品冒頭から四段落目の記述には、「池の尾の町の者は」「あの鼻では誰も妻になる女があるまいと思つたから」「内供の俗でない事を仕合せだと云つた」り、「あの鼻だから出家したのだらうと批評」したりしたとある。鼻を短くする前から内供が無責任で物好きな池の尾の人々の嘲笑や噂の対象になっていたことは否定できまい。

四、人と人との関わりの機微

内供は、寺の内外の個人による自身への対応の違いこそを見抜くべきであった。鼻の療治をおこなった弟子の僧は、内供の用を兼ねてとはいえ、京で知己の医者からその方法をわざわざ教わってきてくれたという。内供は鼻の長いことを気にしていないふりをしているのだから、命じられたわけでも、頼まれたわけでもなく、内供のコンプレックスを正しく見抜いていたのだろうが、自発的に聞いてきて、「わざとその法もすぐにやつて見ようとは云はずにゐた」内供へ「口を極めて」熱心に勧めたのである。

内供の食事の際に持ち上げていた長鼻を粥に落とした中童子や、寺を訪れた侍、用を云いつかった下法師などは、皆、短くなった内供の鼻を「笑」うが、療治をおこなった弟子の僧は、内供の鼻を「笑」ってはいない。もちろん「哂」ってもいない。

「傍観者の利己主義をそれとなく感づいた」内供が「日毎に機嫌が悪くな」り「誰でも意地悪く叱りつける」ようになってしまったから、そのために「しまひには鼻の療治をしたあの弟子の僧でさへ、「内供は法慳貪の罪を受けられるぞ」と陰口を

きく程になつた」とある。ここでも、彼が「哂」ったとも「笑」ったとも記されていない。

　否、はるかに手厳しい。「法慳貪」とは、欲深いこと、無慈悲なことを意味するようだ。[31]「弟子の僧」の〈憤り〉とも思える程の反応は、彼の内供への親愛の情の深さゆえであったのだろう。先に触れた鼻の療治中の「弟子の僧」の内面も〈親切〉〈思いやり〉と素直に受け取り直す読者も多いはずである。内供の〈敵意〉こそが、周囲の〈敵意〉を生み育てた一面もあったことが仄見えてくる。しかし小説では、すぐ後に、「鼻を打たれまい。それ、鼻を打たれまい」と「鼻持上げの木」で「囃しながら」「痩せた尨犬を逐ひまは」す中童子の悪戯と、これは何気なく並置され、目立たぬように溶け入ってしまう。〈傍観者の利己主義〉の虚実を明確には描かぬ配慮と見える。しかし、読者の内面では、「傍観者の利己主義」という言葉に全幅の信頼を置けぬザワメキが、こうした事情と共鳴し、作品は何度も読み直されるのではないか。虚栄心とまで思える〈過剰な自尊心〉は、〈傍観者の利己主義〉で周囲を一色に塗りこめてしまい、それがまた、本当は個別なはずの人間関係を見失わせてしまっている。〈傍観者の利己主義〉は、〈過剰な自尊心〉が実情以上に過剰なものと誤解させていたともいえ、三好行雄が批判した前半と後半とのモチーフの違いや作意の浅さなど、そもそも問われるべきではないのだろう。笑われる理由にしても、もちろん単純に顔変わりした可笑しさからもあるだろうし、隠していた〈自尊心〉が露見したからというものもあるだろうし、「はればれした」表情を今まで内供が見せたことがなかったからでもあるだろう。現実は不可解で複雑で、人々の性格や内供との関係性によって、その対応は〈笑う〉〈笑わない〉の差に留まらず、無限に異なるはずなのだ。作中の〈傍観者の利己主義〉の提示の仕方の〈いかがわしさ〉や虚実の不明は、あらためて周囲の内面を探らせることで、〈自尊心〉との関わりの見直しを読者に要請し、同時に、人と人との関わりの機微を際やかに浮き彫りにしている。

　ただし、描かれたのは荒廃した社会における殺人や強盗などの犯罪とその心理ではなく、日常的な生活空間における一般的な人間関係とその心理であって、内供は「愛すべき内供」と呼ばれるように、〈自尊心〉による演技を「策略」などと、実情に見合わない大げさな言葉で揶揄されるばかりだ。もともと宗教者として偶像視されていない彼は冷たく突き放されて批判されるわけでもない。むしろ、内供に寄り添い、内供の内面を代弁したり、整理したりする叙述は、長い鼻に振り回される「愛

すべき内供」の屈折と、その徒労とに同情的とさえいえる。[32] 読者の誰にでも身に覚えのあるほどの内供の〈自尊心〉への共感、あるいは身につまされる〈ほろにがさ〉。だから〈くすりと笑える〉。ここには、漱石のいう「自然其儘の可笑味がおつとり出ている」「上品な趣」も確かに感じられるのではないだろうか。

また、内供に寄り添った叙述と見える、結末の朝の「明い」光景は、論理的な意味や文脈とは別に、天上世界にも通じる〈明るさ〉、〈すがすがしさ〉を読者に実感させるものでもあり、不明な内供は、〈過剰な自尊心〉の非に未だ気づいてはいないようで、結末でも錯覚を抱きつづけているようだけれども、だからといって、その未来が完全に閉じられてはいないことも何ではなしに伝えられる。[33] こうした結末が構えられたことは、「自然其儘の可笑味がおつとり出ている所に上品な趣」と評された、いまひとつの所以なのだろう。

註

（1）「あの頃の自分の事」（『中央公論』大八・一）。海老井英次「「鼻」―〈自我〉意識と〈人間〉との断絶―」（『芥川龍之介論攷―自己覚醒から解体へ』桜楓社、昭六三・二、初出は『月刊国語教育』2・12、昭五八・二）や今野哲「「鼻」論」（『二松』6、平四・三）などにより、「あの頃の自分の事」の記述に時間的前後関係の虚構が指摘され、内容の信憑性を疑う向きもある。

（2）吉田精一『芥川龍之介Ⅰ』〈吉田精一著作集 第1巻〉（桜楓社、昭五四・一一、初刊は『芥川龍之介』三省堂、昭一七・一二）。

（3）三好行雄「負け犬「芋粥」の構造」（『芥川龍之介論』〈三好行雄著作集 第3巻〉筑摩書房、平五・三、初出は『日本女子大学国語国文学論究』2、昭四六・二）。

（4）他に和田繁二郎『芥川龍之介』（創元社、昭三一・三）にも、内供周囲の人々が「「つけつけと晒ふ」のが、も一度同じ不幸に陥れてみたいという、「或敵意」を意味するようには見えない」との批判がある。小谷瑛輔「芥川龍之介の初期作品における反語的完結性―「羅生門」「鼻」「酒虫」を中心に」（『国語と国文学』87・10、平二二・一〇）は、「鼻」における語り手の顕在化を「超越的な審級が作品に統一的な主題を与えようとして、それが出来ないさまを示す為である」とし、「破綻した内容を語る語り手が可視化されていること」を評価する。

（5）芥川龍之介宛夏目漱石書簡（大五・二・一九）。

（6）芹澤光興「『鼻』解説」（『作品と資料　芥川龍之介』双文社出版、昭五九・三）、山崎甲一「「鼻」の文体について」（『芥川龍之介の言語空間―君看雙眼色』笠間書院、平一一・三、初出は『鶴見大学紀要』23、昭六一・三）、関口安義「他人の目からの解放―「鼻」―」（『芥川龍之介―実像と虚像』洋々社、昭六三・一一、初出は『日本文学講座』第6巻、大修館書店、昭六三・六）、清水孝純「「鼻」「芋粥」にみるグロテスク感覚の行方」（『作品論　芥川龍之介』双文社出版、平二・一二）、宮坂覺「「鼻」を読む―〈禅智内供〉人生最大危機脱出物語」（『芥川龍之介Ⅰ』洋々社、平三・四）、田中実「『鼻』と『龍』」（『都留文科大学研究紀要』40、平六・三）などが、それぞれ「鼻」に〈明るい〉結末を認めている。

作品末を〈暗い〉と読もうが〈明るい〉と読もうが、「閉じられた結末」を読んでいることに変わりなく、結末の「先のある状況を示唆しながらも、しかしそのさらに先にあるはずの内供のそれに対する対応は語られることはない」ことから「閉じられた結末」でもなく、またまったく「開かれた結末」とすべきでもないとする仁平道明「〈開かれた結末〉〈閉じられた結末〉の二元論をこえて」（『解釈と鑑賞』75・9、平二二・九）の問題提起もある。

（7）たとえば、山崎甲一〔註（6）同論文〕は「無理に短うしたで、病が起つたのかも知れぬ」に「後悔や反省」を指摘し、田中 実〔註（6）同論文〕は「いかに己がみすぼらしくもおぞましいものであるかに対する強い恐れ」から「一種敬虔な気持ち」に化した内供の意識の反映として鼻を抑える「恭しい手つき」を解釈している。

（8）寺内の庭の朝の光景に、山崎甲一〔註（6）同論文〕は「昏乱した迷いからふつ切れる、すがすがしい「光」「明」を見る作者の目」を探り、関口安義〔註（6）同論文〕は〈他人の目からの解放〉を獲得し「批判・中傷に耐え、新しく生き抜こうとする主人公の明るい姿」を読む。清水孝純〔註（6）同論文〕は庭の「朝の輝き」を内供の「実の世界への還帰」の安堵と説き、田中 実〔註（6）同論文〕は「鮮やかな程に美しい翌朝の寺内の景色」に「この貴重な体験を通して、あさましい己の姿に出会わずにはいられなかった内供の変貌した姿」を見出だしている。

（9）海老井英次〔註（1）同論文〕は「鏡の中」の内供の囁きを「真の〈自我〉を喪失してしまった内供」の「実像と虚像との奇妙な〈逆転〉によるものと説くが、山崎甲一〔註（6）同論文〕は、「己れの本然の姿に忠実に生きようとする覚悟」をもつにいたった内供が「かうなれば」と「心の中」で言うのは「鏡の中」で言うのとは「事情がまるで違う」とし、宮坂 覺〔註（6）同論文〕は、長鼻に戻った内供にとって「一度目のように〈鏡の中〉は、最早必要ではなかった」から〈心の中でかう自分に囁〉いたと説く。清水孝純〔註（6）同論文〕は、「鏡の中」の囁きを内供にとって「グロテスクの世界を背後に沈めた虚のアイデンティティ」の実現と捉える。蓼沼正美「『鼻』・身体との出会い」（『国語国文研究』115、平一二・三）は、長鼻に戻った際の内供に「抑圧されて来た身体の「感覚」が覚醒され」「具体的な生きる身体へと解放され」た瞬間を認めるも、内供の「幻想的な身体像をも打ち壊してゆく可能性」が作品末で潰えてしまったと読む。

（10）山崎甲一〔註（6）同論文〕は、内供の鼻が長かった時も、短くなった時も「自尊心の毀損を恢復しよう」とする「方法」が、安直に「他者攻撃の方向に流れて行く」と指摘する。

（11）今野 哲〔註（1）同論文〕は、長鼻に戻ったことに気づく直前の内供の「はればれとした心もち」は「鼻が短くなつた時と同じやうな」とある以上、「秋の情景も内供の「錯覚」に見合った情景と解することができる」とする。さらに、「鼻」の草稿と初出・初刊本文とを比較した松澤和宏「「鼻」論―鏡の物語」（『生成論の探究―テクスト・草稿・エクリチュール』岩波書店、平一五・六、初出は季刊『文学』7・1、平八・一）は、「鼻が短くなつた時と同じやうな」が加筆され、「生まれて来る」が「帰つて来る」に書き直されて作品は「反復・回帰の相が強調」されるように推敲されていることを確認した。また、戸松 泉「「鼻」の〈語り手〉」（『小説の〈かたち〉・物語〉のゆらぎ―日本近代小説「構造分析」の試み』翰林書房、平一四・二、初出は『相模国文』22、平七・三）は、「明い」「まばゆく光」る寺庭の情景が「一晩の中に葉を落としたので」「霜が下りてゐるせいであらう」と「根拠」を挙げて「あくまで物理的な現象」として記されていることに着目し、須田千里「鼻」（『芥川龍之介新辞典』翰林書房、平一五・一二）は、「晩秋の明るい庭」を「内供個人の心象風景に過ぎないとすれば、実際に

内供の行く手に明るさを見る必要はない」と解説する。

(12) 今野 哲〔註（1）同論文〕は、「「鏡の中」での判断も、「心の中」での判断も内供の独断である点では同一」で、「かうなれば、もう誰も哂ふものはないにちがひない」との「対他意識に支えられた述懐」の共通性を剔抉している。

(13) 海老井英次〔註（1）同論文〕は、「鼻」を「秋風にぶらつかせ」ている内供の姿に「鼻」の問題が「日常的な反復の中に組み込まれてしまうことが予告されている」と説く。

(14) 須田千里〔註（11）同解説文〕は、「他人の目から解放されたはずの内供が、もう「誰も」哂うものはない、と言うのも腑に落ちない」と〈明るい〉「鼻」論に疑義を呈している。

(15) 田中 実〔註（6）同論文〕は、「小説のなかの事件（長鼻が一旦短くなったエピソード）は〈語りの現在〉から見れば、既に終わったことであり」「実は「内心では始終」今でも「この鼻を苦に病んで」いる」と指摘し、戸松 泉〔註（11）同論文〕は、「「さほど気にならない」ふりをしているにすぎなかった実態を露呈してしまったできごと（鼻が短くなった事件）」が「もたらした結果を暗に指して、その上で語り手は「今でも」といった」と読む。

(16) 松澤和宏〔註（11）同論文〕。

(17) 佐伯彰一『物語芸術論―谷崎・芥川・三島』（講談社、昭五四・八）。

(18) 清水康次「『鼻』・『芋粥』論」（『芥川文学の方法と世界』和泉書院、平六・五、初出は『国語国文』49・10、昭五五・一〇）。

(19) 友田悦生「「鼻」のアレゴリー―超越論的主観の出自とゆくえ―」（『初期芥川龍之介論』翰林書房、平六・一一、初出は『日本近代文学』51、平六・一〇）。

(20) 山崎甲一〔註（6）同論文〕。

(21) 戸松 泉〔註（11）同論文〕。

(22) 松澤和宏〔註（11）同論文〕。

(23) 「「鼻」草稿」『芥川龍之介資料集』（山梨県立文学館、平五・二一）。

(24) 「鼻」は第四次『新思潮』創刊号（大五・二）に初出、翌年刊行の『羅生門』（阿蘭陀書房、大六・五）に所収。

(25) 松澤和宏〔註（11）同論文〕。

(26) 「「鼻」自解」（友人宛書簡の下書きと推測されるが、執筆年月日は不明）。

(27) 吉田精一「鼻」（『日本近代文学大系』第38巻、角川書店、昭四五・二）。

(28) 田中 実〔註（6）同論文〕。

(29) 諸橋轍次『大漢和辞典』巻二（大修館書店、昭三一・五）には、「哂」に「①ほほゑむ。」「②笑ふ。」「③あざわらふ。」との字義が示され、熟語として「哂笑」に「あざわらふ。」の意を記す。ただし、同じ『大漢和辞典』巻八（大修館書店、昭三三・八）の「笑」にも「①わらふ。」「②大の人になれた啼きごゑ。」「③おとるさま。」のうち「①わらふ。」に、「イ よろこぶ。よろこんで口を開けてわらふ。」「ロ あざけりわらふ。あざわらふ。」「ハ こゑを出さずに顔をほころばせる。ほほゑむ。」「ニ 花さく。」とあり、「笑」にも「あざわらふ。」の意がないわけではない。上田萬年・岡田正之・飯嶋忠夫・他共編『大字典』（啓成社、大六・三）、服部宇之吉・小柳司氣太共著『新訂詳解漢和大字典』（冨山房、昭一一・一）でもほぼ同様に、「哂」にも「笑」にも「あざわらふ」の意を確認できる。

(30) 嶌田明子「「鼻」における語り手の意味」（『上智近代文学研究』7、平一・三）は、作中の「哂」と「笑」との書きわけに着目し、内供を「誰も哂ってはいないのだ。ただ笑っているだけである」と説き、「内供のことは何でも知っているが、それ以外のことは本当にはわからない」語り手の内供批判が、「逆に我々読者に内供への同情心をおこさせてしまう」と主張する。これを享けて今野 哲〔註（1）同論文〕は、「笑

ひ」の表記に較べて「一応「哂ひ」の方に悪意のニュアンスが込められていると考えられる」とした。松澤和宏（註（11）同論文）は、「鼻」草稿の改稿過程で、語り手の説明における漢字の「哂」が「笑」へ書き換えられていると指摘する。

一方、これらを享けて高橋龍夫「「鼻」におけるベルクソン哲学の陰影」（『日本語と日本文学』32、平一三・二）は、芥川がベルクソンの『笑い』を読んでいたことを井川恭宛の芥川龍之介書簡で確認し、内供が気づいた嘲笑の意味を伴う「哂」にベルクソンのいう〈笑われる当人に向けられた笑い手たちの半無意識的に悪意を含んだ共犯意識〉、いわゆる「底意」、「傍観者の利己主義」に近いものを認めている。高橋は、この働きを「社会的矯正作用」と呼び、「虚栄心にこだわる内供と町の噂に集団的安定を無意識に願う池の尾の町の者との直接的な衝突は回避され、両者の対立は緩和されている」と説く。同じく社会のなかの内供の役割に着目する篠崎美生子「王の「人間宣言」は許されるか―芥川龍之介「鼻」を契機に―」（『日本文学』54・1、平一七・一）は、内供が周囲から「恒常的に緩やかな暴力を受けることで、池の尾の王としての役割を果たし」共同体の秩序が保持されていたと主張する。

(31) 大槻文彦『言海』（六合館、明三七・二）には、「けん・どん　慳貪」の項目に「（一）己ガ物を吝ミ、他ノ物ヲ貪ルコト。（二）転ジテ、苛キコト。情愛ナキコト。ムゴキコト。ジヤケン。苛酷」とある。また、中村 元・他編『岩波仏教辞典』第二版（岩波書店、平一・一二）には、「現代語の〈突慳貪 つっけんどん〉も、もとは、むさぼり、物惜しみする心理状態から起こる態度に由来した語であろう」との解説がある。

(32) 山田伸代「〈語り手〉の優しいまなざし―『鼻』小考―」（『日本文学』60・8、平二三・八）は、池の尾の衆俗の「傍観者の利己主義」をも課題とする「優しい」〈語り手〉は、「身体的差異によって苦しむ」「障害のある内供の「生きるかたち」に救いを与えている」と読む。

(33) 安藤公美「芥川文学論・繰り返しの効果―「鼻」「きりしとほろ上人伝」「庭」その他―」（『フェリス女学院大学日文大学院紀要』2、平六・七）は、元の長鼻に戻った際に内供が「かうなれば、もう誰も哂ふものはないにちがひない」と、「鏡ではなく心の中で囁くこと」から鼻が短くなった際とは異なり、「内供はその鼻との共棲を受け入れ」たと説く。作品末に内供の精神的成長を認める読解には同意しがたいが、「反復、繰り返し」で覆いつくされている芥川文学において反復という戦略が、ずらしや空白という余地を生み、読者の前に作品が開かれるものとなるとの指摘は貴重である。「杜子春」（『赤い鳥』大九・七）の主人公は、あり余るほどの黄金を使い果たすという愚かな同じ間違いを三度目には繰り返さなかった。「鼻」でも、内供が自らの非に気づく機会が全く絶たれているわけではないだろう。

附記―芥川龍之介の文章は全て岩波書店版『芥川龍之介全集』全24巻（平七・一一～平一〇・三）に拠る。